

越境する精神



文学研究科委員長

ながみ 永見

ふみお 文雄

中央大学大学院文学研究科は制度的には中央大学の文学部を基礎学部としてその上に成り立っている研究科です。とはいえ他学部・他大学の卒業生や社会人一般に対してもまったく対等に広く門戸が開かれているのは言うまでもありません。名称は「文学」によって代表されていますが、狭義の文学の他にも歴史学・哲学・社会学・教育学・心理学等の「人文諸科学」ならびに社会学系の諸学をも対象とするきわめて幅の広い専門分野を備えており、このことが他の研究科には見られない大きな特色となっています。すなわち、十二世紀に西洋で大学という知の制度が人類史上初めて成立した時にすでに存在していた学問から、つい最近誕生した最先端の学問まで多種多様な研究分野を網羅したまことにユニークなところなのです。十二専攻を列挙してみましょう。国文学・英文学・独文学・仏文学・日本史学・東洋史学・西洋史学・哲学・社会学・社会情報学・教育学・心理学です。さらに付け加えれば、心理学専攻に昨年未あらたに博士後期課程の設置が認可されたため、二〇〇二年度からは十二専攻のすべてがめでたく博士の前・後期課程を持つこととなりました。こうして一九五五年の発足以来四十有余年、文学研究科は着実に発展してきたと言えることができます。

しかしながら日本の大学は現在未曾有の大変革の時代を迎えており、大学院もけつしてその例外ではありません。著しく大衆化した学部の教育に代わって高等教育の役割は必然的に大学院へと移行し、同時に大学院に対する社会のニーズも次第に多様化してきています。文学研究科でも社会人

教育や外国人留学生の受け入れなど様々な試みを行い、これまで大学院の主要な存在理由とされてきた研究者や大学教員の養成に加えて、高度な専門的能力を持つ職業人や実務家の養成をも視野に入れた改革に鋭意取り組んできたのも、こうした現実を踏まえた上でのことです。他方一層深刻なのは学問全般にわたる知の再編現象の深く広い進行であります。十九世紀の国民国家的な枠組みに基づく文学・歴史系の狭い学問区分は早晚再編を余儀なくされることでしょう。学際化と言いつつ国際化と言いつつ、知の越境が制度として定着する過渡期に今やわれわれは立ち会っているのです。二十一世紀を迎えて国際社会があらたな秩序を模索しているのと表裏一体のこうした現象は、換言すればわれわれが今まさに乱世を生きているということの意味します。しかるに乱世ほど独創性を発揮できる時代はなく、カオスの中でこそオリジナリティーは輝くのです。東京都立大学や東京外国語大学との協定を初めとする他大学との単位互換制度の展開、垣根を取り払った専攻横断的な「総合講座」の開設、比較文化などの共通科目の設置も、上に述べた無視し得ない知の趨勢とけつして無縁のことはありません。

ここで文学研究科の特徴を七つの項目にまとめてみましょう。一、多種多様な専門領域 二、専攻を横断するカリキュラムの設置 三、木目細やかな個人指導体制 四、専攻毎の図書室・演習室の完備などの充実した研究環境 五、他大学との活発な研究・教育交流 六、外国人研究者の招聘と国際交流の意欲的な取り組み 七、博士学位取得と国外留学の奨励、です。専攻別の特色などについても詳しくは『中央大学大学院ガイド2002』の18頁から21頁を、担当教員については『文学研究科教員紹介2002』を参照してください。

文学研究科では中央大学全学の試みの一環として昨年、全専攻が真摯に自己点検・自己評価を行い、現状を確認しながら将来に対する展望を明らかにしました。専門を深く究めながらもけつして悪しき「たこつぼ」的思考に陥ることなく、旺盛な越境的意気込みをもって狭い専門の境界を乗り越えてゆく意欲を持った、独創的な精神と人材を、文学研究科は心から歓迎いたします。